

新規感染症に立ち向かう

馬場 直子

2020年は56年ぶりに日本で開催されるオリンピックイヤー、そして新天皇のもと令和初のお正月であり、例年以上に晴れやかな気分の年明けと感じていた。それからわずか2〜3カ月後には世界中で新しい人類の敵と戦う、いわば第3次世界大戦のような惨事がおこっているなんて、いったい誰が予想できただろうか？

しかし人類の歴史上では、われわれの祖先はさまざまな病原菌と戦ってきた歴史があったことが思いおこされる。いまから100年ほど前に世界中で極めて多くの死者を出したスペイン風邪もその1つで“1918年パンデミック”と呼ばれた。

1918年1月から1920年12月までに世界中で5億人が感染したとされ、これは当時の世界人口の4分の1程度に相当する。死者数は1,700〜5,000万人、あるいは1億人に達した可能性も指摘されるなど人類史上最悪の感染症の1つである。日本では、当時の人口5,500万人に対し約2,380万人が感染したとされる。

このパンデミックに当時の政府や自治体はどう対処したのだろうか？ スペイン風邪の病原体であるH1N1型ウイルスは、当時の光学顕微鏡でみることができなかったのも、まったく未知の敵と戦っていたことになる。それでも、政府や自治体が手をこまねいていたわけではなく、さまざまな苦肉の策を講じていたことに驚く。1919年に内務省衛生局が一般向けに出した「流行性感冒予防心得」を一読すると、当時の人々の未知なる伝染病への対処が、現代の新型コロナ禍における一般的な対処・予防法と酷似していることがわかる。「人ごみに出ない、マスクを着用する、うがいの励行、身体弱者はとりわけ注意すること」とあり、学校の休校、各地での集会、力士の巡業や活劇の中止、人ごみの禁忌など、現在の状態と重複する部分が多いのである。その後、スペイン風邪はいったん日本の隅々にまで拡大し、限界を迎え、免疫を獲得した人が生き残り、約2年後に自然に沈静化したという。

われわれは、100年前の人類に比べてはるかに多くの優れた診断技術を持ち、敵を知り、それに向けた治療やワクチン開発も始められている。しかし一方では、大量で高速な移動手段を持ち、世界中で絶えず人の行き来がなされる経済・社会構造となっており、1つの地域から発生した感染症があっという間に世界中に拡大してしまった。

政府や自治体は密集・密接・密閉の3密を忌避し、外出を制限することを呼びかけているが、まだまだ若者を中心に守られていないという。われわれも学会や講演会などがことごとく中止となり、院内感染対策に追われ、ストレスの多い毎日ではあるが、100年前の祖先の苦難に思いをはせ、過去から学び、「スペイン風邪から100年」という節目に出現したパンデミックに心を一つに立ち向かうときではないかと思う。